
冬恋

時乃綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬恋

【Nコード】

N4776F

【作者名】

時乃綾子

【あらすじ】

なんのへんてつも無い日常を送っていた“僕”にいきなりの恋人から別れを告げるメールが届く…“僕”はどのような選択をし、そしてどのように再生をはたして行くのか。失意の“僕”の再生の物語。

第1話：冬の始まり

「別れて」

ある寒い冬の日…僕の恋人の夢見子^{ゆみこ}から届いたあまりにもいきなりすぎるメールだった。

生まれてから何度か味わう、しかし決して慣れることの無い感覚が身体中に走る。

僕は混乱しつつも、気を取り直しメールを返した…

「ゴメン。」

僕が何行にも書きたいかに別れたくないか病的と言えるまでの文章への答えはこの冷たい一言だけ。

…これは確実に冗談でもなんでも無い。いわゆるカップルの真面目な“別れ”というやつなのだ。

人には大げさに聞こえるかもしれないが彼女は文字通り僕にとって最愛の人。

運命の人だとさえ思った。

月並みなセリフだが、彼女のためなら僕はきっと死ねた。

それなのに…

恥ずかしながら恋愛経験の少ない僕は振られた原因がわからない…
と言いたところだったが、残念ながら思い当たることは少なからずあった。

そう、それはこの僕のチキンハート。

毎回毎回飽きずに緊張して、同じような言葉を繰り返した。
半年間で手をつなぐのがやっと。

こんなんじゃ愛想を尽かされて当然だと自分でも思う。

しかし僕は、心の中ではお互い分かり合っているなんて幻想を抱いていた。

それに、普段はあまり感情を出さずこっちに合わせてくれ、ちよつとズボラなところがある夢見子が自分からそんな事を言い出すとは思っても見なかったのだ。そして僕が必要以上にチキンハートだったのは夢見子を絶対に失いたく無くて、大切にしていたからだった。

それなのに…こんな形で、しかもメールなんてあつけない形で終わりを迎えるなんて…

自然と涙が溢れてきた…

もうなにかもどうでも良くなった僕はひたすら泣いて泣いて泣きつかれていつの間にか深い眠りについていた。

ここから、僕の長い長い冬は始まったのだった。

第2話 “それ”の始まり

気が付くと翌日の昼を過ぎていた。

昨日のことが夢だったらどんなに幸せだろうか。

しかし、枕には涙の後、そして腫れた瞼がそうでないことを物語っている。

まだ頭は混乱から完璧に立ち直れず、ぐちゃぐちゃのままだ。

幸い今日は冬休み最終日。

明日から大学3年のラスト1ヶ月が始まる。

僕と夢見子は同じ沿線だが違う大学の3年生。

そもそものきっかけは、僕が夢見子に声をかけたことから始まった。一つ断っておくが、僕は決して女の口に簡単に自分から声をかけるタイプではない。

しかし1年以上前…そう。初めて夢見子を電車で見たその日から僕は心を奪われてしまった。

毎日見えるわけではなく、たまに見かける程度…日に日に思いは強くなっていく。

そしてある日、ついに僕は一世一代の勇気を出してアドレスを聞いたのだった。

こんなに恋愛に対して積極的に動いたことは後にも先にもきつと、これっきりだろう。

僕にとってその行為は、それほどまでの覚悟だったんだ。だけど、大変なのはこれからだった。可愛くて、どこか不思議な空気を持っていた夢見子は、想像以上に一般のいわゆる普通の女のことはかけ離れていた。

まず、第一にズボラ。

面倒くさがりとかそういう次元を超えてズボラ。

そのせいもあり、メールは本当に続かない。

僕にとって女の子とはメール大好き、むしろすぐ返さないと怒りさえする、メールとは煩わしいとさえ思っていた。

しかし、夢見子とは続かない。

だから最初のほうは僕は嫌われてるもんだとばかり思って、電車でたまに見かけても気付かぬふりをしていた。友人達からも諦めるように何度も勧められた。

しかし、この恋に運命さえ感じていた僕はどうしても諦めきることが出来ず、ある日、次に電車で会えたら声をかけてみようと思った。

そして数日後―その時が来た。朝の電車で夢見子が乗っていたのだ。

僕は震える足を押さえつつ、勇気を出して近づいた。そして緊張し

ながらも最後のチャンスのつもりで話しかけた。

「おはよう!!」

そういたって普通の挨拶をした僕に夢見子も一言

「…おはよう」

そう笑って返してくれたのだ。後々考えると、よっぽど人格に問題が無い限り、挨拶をされたら挨拶を仕返すのは一般的な日本人として、いや、人間として当たり前の行為だ。しかし、その当時悩みに悩んでいた頃だったので挨拶をされ返したただけですっかり舞い上がってしまった僕は夢見子の顔が天使のように微笑んでいるように見えた。

実際、笑っていたのかもしれないが、それもよくよく考えると別に特別なことでもなんでもなく当たり前のことなのだが…

とにもかくにも、無駄に自信をつけた僕のそれからのアタックは凄かった。

今にして思えばそれも普通、いや、普通以下のアタックだったように思えるがそれは僕にとっての精一杯のアタック。

そして、何度か会ってもらえるようにもなり、本当に少しずつではあるが夢見子の心も僕に開いてくれるようになっていた。

その頃になると僕だけが一方的に話すのではなく夢見子も質問を返したり話題を降ってくるのが少しずつだが増えて行った。

そしていろんなことを話すようになり、何故、夢見子が普通の女の子とは違う不思議な雰囲気を持っているのかその理由らしきものもわかってきたのだった…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4776f/>

冬恋

2010年11月19日08時41分発行